

## 家庭科教員養成カリキュラムにおける 被服構成学実習の実態と課題

木村美智子\*

(2014年8月8日受理)

## A Study on the Clothing Production Experience in Home Economics Education Curriculum

Michiko KIMURA\*

(Received August 8, 2014)

### はじめに

家庭科は日常生活に密着した教科であり、指導内容や題材は社会状況の変化を受けることが多い。生活の合理化が進み、既製服が普及した結果、日常生活における被服製作は必要不可欠な存在とは言えず、家庭科においては被服製作から、被服の入手・手入れに関する知識や技能の習得へと重点が移ってきた経緯がある。その結果、被服製作が選択となり、実習時間が削減されたことを受け、教育現場では短時間で製作可能な基本的な内容の指導を余儀なくされている。

こうした中で、被服製作の教育的意義は、手指の巧緻性を発達させ美的感覚や創造性を養い、個性の表現とともに生活に潤いを与える手段になることが指摘されており（堀内，1988）、いかにして現状に適した指導方法や題材を開発するかが必要とされている。川合らは、実習時間の削減や被服製作の選択化の中でどのような指導内容・題材を開発すべきかを検討し、小・中・高等学校の系統性に配慮した製作題材を提示している（川合，2008）。三輪らは大学生を対象として、小・中・高等学校で学んだ被服領域の学習内容・被服製作の経験を調査し、次の2つを指摘している（三輪，2000）。

○「ミシンに関わる課題」：1人1人に行き渡らない、ミシンをうまく取り扱えない

○「教材に関わる課題」：小・中・高等学校すべて同じ教材（エプロン）を取り上げていることから、発達段階に応じた教材開発の必要性、時間内に仕上がる実習教材を多く開発して生徒に選択させる

以上のことから、教員養成大学において、家庭科教員を目指す学生への被服製作指導力を育成するためには、縫いの技法（手縫い、ミシン縫いなど）と短時間で製作可能な教材研究が重要になる

---

\*茨城大学教育学部（〒310-8512 水戸市文京2-1-1；College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）.

と思われる（長山，2011）。そこで，本研究では被服製作を担う教員養成指導のあり方を探ることを目的とし，大学生を対象として各学校段階における被服製作学習経験および縫いの技法の習得経験について分析を行った。

## 研究方法

### 1. 調査の概要

調査対象は茨城大学教育学部の学生とし，中学校教諭普通免許状（家庭）に必要な専門科目「被服構成学基礎」（実習1単位）の受講生とした。この科目は1年生対象の科目であり，26年度受講生17名，25年度受講生15名，24年度受講生16名，23年度受講生14名であり，ほとんどが家庭選修の女子学生である。本調査は23年度～26年度受講者62名を対象に26年7月に実施し，有効回収率は66.1%，41件であった（表1）。

表1 調査対象学生

学年	学生数	%
1年	13	31.7
2年	7	17.1
3年	11	26.8
4年	10	24.4
合計	41	100.0

### 2. 調査項目

表2に示すように，調査票は，小・中・高校における被服製作の学習経験や意見・感想，高校から現在までの被服製作の経験，ミシンに関わる知識や技能に関する質問から構成されている。

小・中・高校における被服製作の学習経験では，被服分野の学習内容・経験を覚えているかどうか，ミシンを使った被服製作の学習経験・作品名，ミシン使用に対する好感度について，校種別に調査をした。手縫いやミシン縫いの被服製作に関する小・中・高校段階での意見・感想から，製作教材の選定や縫いの技術習得上の課題を明らかにしたいと考えた。高校から大学生の現在に至る被服製作の経験を質問し，製作への関心度を調査した。ミシンの使用に関しては多くの課題があると予想されるので，被服製作への関心度との関連性を明らかにするため，ミシンに関する知識や技能を調査した。

表2 調査項目

1. 小・中・高校における被服製作の学習経験 (1)被服分野の学習内容・経験の記憶 (2)ミシン製作の学習経験の有(作品名), 無 (3)ミシン使用の好き嫌い
2. 小・中・高校における手縫いやミシン縫いによる被服製作に対する当時の考え(自由記述) (1)小学校時代 (2)中学校時代 (3)高校時代
3. 高校在学中から現在までの被服製作の経験 手縫い, ミシン縫いの両方/手縫い/ミシン縫い/製作していない
4. ミシンに関する知識と技能 ミシン各部の名称/ミシンの調整方法/ミシン縫い

## 結果および考察

## 1. 被服製作の学習経験

小学校・中学校・高等学校の各段階における被服分野の学習内容やミシン製作の学習経験の調査結果を表3に示す。被服分野の学習内容・経験を記憶している学生は小学校の記憶が最も高く、次いで中学校、高等学校の順である。ミシン製作の学習経験についても同じ傾向であるが、小学校 87.8%、中学校 70.7%、高等学校 58.5%と学校段階が上がるにつれて学習経験の低下が顕著である。

一方、ミシンを使うことについて、「好き・どちらかといえば好きだった」という回答は小学校 70.7% → 中学校 80.5% → 高等学校 80.4%と学校段階が上がると増加し、中学校と高等学校では同程度であった。2007年に実施された中学校第3学年を対象とする調査(国立教育政策研究所教育課程研究センター, 2009)においても、ミシンや針を使ってもものを作ることが「好き」・「どちらかといえば好き」を合わせると、ミシン製作に好感を抱いている生徒は6割近くいることが報告されている。ミシン製作の学習経験とミシン製作への好感度の関係は一致しないことから、ミシン製作の学習経験に何らかの課題があると示唆される。この点については、次節において考察を行う。

表3 小・中・高校における被服製作の学習経験(%)

	小学校	中学校	高校
被服分野の学習内容・経験を覚えている	92.7	87.8	82.9
ミシン製作の学習経験がある	87.8	70.7	58.5
ミシンを使うのが好き・どちらかといえば好きだった	70.7	80.5	80.4

## 2. 被服製作に関する意見・感想の分析

各学校段階における被服製作の経験をどのように感じていたのか、当時を思い出し自由記述で全員に回答してもらった。表4に小学校での被服製作に対する結果を示す。

製作では多い順に「エプロン」(39.0%)、次いで「ナップザック」(31.7%)であり、この2つで全体の7割を占めていた。いずれもキット教材として提供されたものが多い。学生の多くは製作が「楽しかった」と回答しているが、「自分の好きな柄の布を選びたかった」(No.40)という意見もあるように、小学校の被服製作教材は画一的になり、児童の興味関心を高めることにつながらない可能性が示唆される。ミシン操作では、「手を縫ってしまう不安やミシン針が折れることへの不安」(No.7,19,31),「1人一台が使えず進捗が遅れる」(No.32),「使い方を丁寧に指導してもらえなかった」(No.10)などの理由からミシンを使うことへの苦手意識が生まれることが明らかとなった。

表4 小学校の被服製作に関する感想・意見（自由記述）

No.	記述内容
1	記述なし
2	エプロン／裁縫が好きだったので製作は楽しかった。
3	エプロン／初めて製作し思いで深いので、捨てずにとってある
4	エプロン／ミシンで縫う感じが楽しかった。
5	フェルトの作品／自分で製作するのが楽しく家庭科の授業は毎回楽しみだった。手芸クラブに所属し友達どうして作品を交換した。
6	エプロン、ナップザック／楽しかった。友達に教えてあげることが好きだった。玉止めの練習をイチゴの種で練習したことを覚えている、自分は何個できたか、どのくらいきれいこできたかを競いながら楽しんだ。
7	ランチョンマット、エプロン／楽しかった半面、難しく感じた、友人がミシンで手を縫ってしまい怖かった。
8	エプロン／キットを使った製作でとても簡単だった。
9	エプロン／キットを使った製作、直線縫いのみで簡単だった。
10	ナップザック／ミシンの上糸・下糸のかけ方がわからず、先生も丁寧に教えてくれず少し嫌いだ。初めて作品が仕上がった時はとても嬉しかった。
11	エプロン／純粋に楽しかった
12	手縫いで小物を作るのは楽しかった。
13	ウォールポケット、ナップザック／難しい足踏みのミシンで大変だった
14	エプロン／楽しかった
15	エプロン、雑巾／楽しかった
16	ランチョンマット、カバン／とても楽しく、1人よりも早く終わり、さらに色々製作した。
17	エプロン／ミシン製作は楽しかった。
18	手縫いが楽しかった。
19	ミシン針を折ったことがあり、それからトラウマで布の製作が苦手になった。
20	ウォールポケット、ナップザック／ものを作ることが楽しかった。
21	記述なし
22	エプロン／直線縫いの練習や基本的なことが中心。
23	エプロン
24	ランチョンマット、手提げ袋／ミシンを使いたくてたまらなかった。ランチョンマットに自分の好きな絵をペンで描き楽しかった。
25	ラック／母親と一緒にミシンを使い製作する授業で楽しかった。
26	ナップザック、小物／ミシンは苦手だが手縫いは楽しい。
27	初めて手縫いをして楽しかった。
28	ナップザック、クッションカバー／ものづくりが好きで手縫いやミシンの製作が楽しかった。
29	巾着／手の骨折で実習に参加できなかった。今でも玉結びに苦手意識がある。
30	クッション／初めてミシンを使いワクワクした。
31	ナップザック／ミシン針が折れる理由がわからずうのが怖かった。手を縫ってしまいそうだった。直線縫いができた時は嬉しかった。
32	ナップザック／ミシンの使い方が難しいこと、1人一台が使えなかったので進まなかった。
33	ナップザック／ミシンが難しかった。
34	ウォールポケット／手縫いの楽しさを知り、いろいろな作品を作った。手縫いの基本を習得し被服製作を楽しめた。指導の上手な家庭科の先生にあこがれた。
35	エプロン、トートバック、クッションカバー、ナップザック／キットを毎回購入。ミシンで作るのが純粋に楽しかった。
36	トートバック／実習は楽しいと思った。
37	クッションカバー、コースター／手縫いは練習用キットで行った。ミシンでは準備段階でうまくいかず、苦手意識が生まれた。
38	ナップザック、エプロン／自分で工夫できたので楽しかった。
39	ナップザック／製作は好きだった。
40	フェルト小物、ナップザック、弁当包み／ミシンが少なくほとんどを手縫いで仕上げた。キット教材から選んだが、自分で店に行き好きな柄を選びたかった。
41	エプロン／玉留めができず苦痛だった。ミシンはすごく難しかった。

中学校の被服製作については（表5）、製作した作品は小学校とは一転して種類が多岐にわたること、製作の難易度も様々であることがわかった。ミシンの操作についても技能の開きが大きくなる傾向がみられる（No.12, 20, 25）。ミシン台数が不足（No.24, 34）、家庭科以外の教員による指導（No.35）が被服製作への意欲を低下させる一因になっていることが示唆された。

表5 中学校の被服製作に関する感想・意見（自由記述）

No.	記述内容
1	ぬいぐるみ製作を楽しみながら作った
2	覚えていない
3	エコバック／かなり機能的な作品で日常生活で活用している。
4	一枚の布からハーフパンツを製作して感動した。
5	エプロン、ティッシュケース／上手に作るだけでなく速さも意識した。
6	エコバック／小学校時よりも何をやったかあまり覚えていない。エコバック製作ではレースをつけたり刺繍をしたり自分が思い描く作品づくりが楽しかった。
7	覚えておらず製作はしなかったと思う。
8	エコバック、ペットホルダー／キット製作による学習。まつり縫いがうまくできなかった。
9	記述なし
10	エプロン／ロックミシンが難しかった。自分のペースで製作でき楽しかった。
11	ハーフパンツ／上手にできず悔しかった。人によって進度に大きな差があった。
12	ミシンは得意ではなかったがほめられてことを覚えている
13	Tシャツ／男子が（ミシンの）使い方を理解するのに苦しんでいた。
14	刺繍、キーホルダー／楽しかった。実習は好き
15	ミシンを使ったと思うがあまり覚えていない
16	雑巾／覚えていない
17	ぬいぐるみ／手縫いが面倒だったが、好きなものを製作し楽しかった。
18	面倒だと思ったが意外と楽しかった。
19	覚えていない。
20	なべつかみ／ボビンに糸を巻くのが難しい。
21	裁縫道具を購入したが何を作ったか覚えていない。
22	雑巾／小学校ほどにはミシンを使わなかった
23	ハーフパンツ、トートバック
24	ズボン、ランチョンマット／ミシンを使うのに順番待ちで暇だった。
25	ハーフパンツ／ミシン縫いは好きだった、中学でも同じ。調子の悪いミシンを直したり、友達の分もやってあげた。手縫いで絵本製作をした。
26	被服に関する記憶がない。
27	クッションカバー／ミシンの調子が悪くイライラした。
28	甚平、浴衣／選択で家庭科を履修、平な布から作る浴衣の構造にとっても興味がわいた。
29	雑巾／ミシンの調整が難しく苦労したが、縫いはじめると楽しかった。
30	覚えていない。
31	はしれ／直線縫いや返し縫いの練習をしたが、何に役立つのか分からずつまらなかった。
32	ベスト、幼児の絵本作り／楽しかった。
33	大好きだった。
34	縫いぐるみ、布絵本／ミシンは台数が十分ではなくほとんど使わなかった。細かい手作業が好き、楽しかった。
35	ティッシュカバー／家庭科の教員がおらず教科外の先生が教えていた。熱心ではなかった。
36	記述なし
37	トートバック、ランチョンマット／ミシンの使い方をわかりやすく学べたため苦手意識が軽減された
38	おもちゃづくり／保育の分野で製作。
39	スリッパ／できない子の手伝いもした。授業の進度が遅く感じた。
40	おもちゃづくり、スクエアバック／自分で好きな布を選びたかった。
41	ナップザック、エプロン／うまく作れて嬉しかった。

高等学校の被服製作では（表6）、「エプロン」が最も多く（19.5%）、小学校ほどではないが取り上げる教材が画一的であることが示唆された。一方、「製作しなかった」（14.6%）学生もあり、表3で示された「ミシン製作の学習経験」が小・中・高で最も低いことと一致している。しかしながら、「ミシンを使うことが好きだった」学生が8割いることを考えると、高校段階において生徒の被服製作への意欲・関心を維持できるような実習の指導・教材を工夫することが望ましいと思われる。現実には、家庭科の指導時数や実習時間の減少があり、制度的な問題が壁となっていることは否めない。

表6 高校の被服製作に関する感想・意見（自由記述）

No.	記述内容
1	ミシンでエプロン製作をした、手縫いに比べミシンは少し難しいと感じた
2	トートバック／ミシンに慣れ、手縫いが面倒に感じた
3	ランチョンマットの刺繍／模様を描くのが難しかった。
4	エプロン／小中学校より複雑な行程で製作した、ミシンを使うのは楽しい。
5	弁当袋／仕方がないが実習の時間が少ないこと、ミシンが使えず残念だった。
6	調理実習はあったが被服製作がなかった。
7	まったくしなかった。
8	製作しなかった／布の性質の違いを学習。
9	半纏／難しく正直あせった。
10	記述なし
11	被服製作の授業はなかった
12	上手ではないが製作は好きだった
13	ボタン付けやまつり縫いを練習した。
14	ファーストシューズ／ワクワクしながら製作、楽しかった。
15	好きなものを作った
16	エプロン／個人差が激しく、他の人を手伝っていたなし
17	ペットボトル入れ／手縫いで2時間で製作、手縫いは面倒だが楽しかった。作品は使っていない。
18	楽しかった
19	覚えていない。
20	ハーフパンツ／人より早く終わったがミシンよりも手縫いの方がすきだった。
21	エプロン／ミシンの使い方をしっかり学べ、ためになった。
22	製作時間が短く、昼休みや放課後も使って完成させたが大変だった。
23	エプロン
24	手提げ袋／手縫いが面倒だったという記憶しかない。指定された布で好きなものではなく、すぐになくした。
25	Tシャツ／難しく上手にできなかったが、ミシンや手縫いは好きだった。
26	エプロン
27	弁当袋／ミシン縫いは楽しく手縫いは面倒だと感じた。
28	巾着／これ以外何も製作しない授業だったので楽しくなかった。小中の経験や技術を活かしたかった。
29	トートバック／キットを使った製作だった、浴衣やブラウスなど製作したかった。中学レベルの授業だと感じた。
30	覚えていない。
31	実習はなかったように思う
32	弁当包み／時間が足りなかった。
33	製作はしていない
34	時間数が少なく、被服は実験のみで実習はなかった。小中学校に比べ被服に対する意欲が低下しつまらなくなった。
35	エプロン／まつり縫いができなかった。
36	おもちゃ／幼稚園訪問で持参する手作りおもちゃを作った。デザインや大きさなど細部にこだわって作った。手縫いで大変だったが、自分の思い通りの作品が作れて大変満足した。
37	ボタン付け／なみ縫い、まつり縫い、返し縫い、ボタン付けを練習した。
38	エプロン／またエプロンか、と思った。
39	巾着／製作はほとんどなかった。体育祭の衣装作りは楽しかった。
40	製作しなかった／なみ縫いのみ
41	製作しなかった

### 3. 被服製作における経験と技能との関係

高校在学時より大学入学後の現在まで、被服製作の経験を調査したところ、学年によって違いがみられた ( $p<0.1$ ,  $\chi^2$  検定)。大学1年生～4年生まで全ての学年において「手縫いとミシン縫いの両方を経験している」が最も多いことがわかる。「手縫いのみ」が最も多いのは1年生で13.2%、2年生以上は3%未満である。

表7 高校生～現在までの製作経験の違い※

学年	人数	製作経験 (%)		
		手縫い・ミシン縫い 両方	手縫い	ミシン縫い
1年	12	13.2	13.2	5.3
2年	7	10.5	0.0	7.9
3年	9	15.8	2.6	5.3
4年	10	13.2	0.0	13.2
合計	38	52.6	15.8	31.7

※ 学年間の有意差 ( $\chi^2$  検定) :  $p<0.1$

表8に「ミシン各部の名称を知っているかどうか(知識)」を学年間で比較した結果を示す。

「よく知っている」4点, 「だいたい知っている」3点, 「ほとんど知らない」2点, 「全く知らない」1点として, その平均値を比較すると2年生が最も高く次いで4年生, 3年生, 1年生の順番である ( $p<0.05$ , 一元配置の分散分析)。

表9には「ミシン調整の技能」を学年間で比較した結果を示す。ミシン調整の技能<ミシン針の交換・上糸かけ・ボビンへの下糸巻き・ボビンケースの取り付け・糸調子の調節・縫い目の調節>6項目合計の平均値をみると, 2年生が最も高く, 次いで3年生, 4年生, 1年生の順番である ( $p<0.01$ , 一元配置の分散分析)。

表10は「ミシン縫いの技能」である<返し縫い・曲線縫い・ジグザグ縫い>3項目合計の平均値を比較した結果である ( $p<0.005$ , 一元配置の分散分析)。2年生が最も高く, 次いで4年生, 3年生であり, 1年生が最も低い結果である。

本調査の対象となった学生は, 1年生が「被服構成学基礎」のみの受講者, 2年生以上は「被服構成学基礎」に加えて「被服構成学応用」を履修している学生がほとんどである。したがって, 2年生以上の学生は1年生に比較して, 被服製作経験のみならず, ミシン縫いの技能は平均して高く出るのは当然といえるだろう。今回, 2年生が突出して高得点となり, 3年生, 4年生がやや低い得点となった背景には, 2年生以降, 授業として被服製作を受講する機会がなくなってしまうためではないかと考えられる。したがって, 1年次・2年次と積み重ねてきた被服製作の技能をしっかりと身につけて家庭科教員として現場に出ていくためには, 2年次以降にも被服製作が続けられるようなカリキュラム構成にすることが必要であると考えられる。

表 8 ミシン各部の名称

学年	人数	平均値※	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
1年	13	2.2308	.59914	.16617	1.8687	2.5928	1.00	3.00
2年	7	3.1429	.69007	.26082	2.5047	3.7811	2.00	4.00
3年	11	2.3636	.67420	.20328	1.9107	2.8166	1.00	3.00
4年	10	2.8000	.63246	.20000	2.3476	3.2524	2.00	4.00
合計	41	2.5610	.70883	.11070	2.3372	2.7847	1.00	4.00

※4点：よく知っている 3点：だいたい知っている 2点：ほとんど知らない 1点全く知らない の平均値  
 学年間の有意差（一元配置の分散分析）： $p < 0.05$

表 9 ミシン調整の技能

学年	度数	平均値※	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
1年	13	15.0000	4.08248	1.13228	12.5330	17.4670	8.00	20.00
2年	7	22.0000	3.41565	1.29099	18.8411	25.1589	15.00	24.00
3年	11	20.8182	2.35874	.71119	19.2336	22.4028	18.00	24.00
4年	10	18.1000	6.98331	2.20832	13.1044	23.0956	0.00	24.00
合計	41	18.5122	5.17263	.80783	16.8795	20.1449	0.00	24.00

※ミシン調整の技能に関わる6項目合計の平均値

項目毎に、4点：できる 3点：説明書を見ればできる 2点：できない 1点：やったことがない 0点：わからない  
 学年間の有意差（一元配置の分散分析）： $p < 0.01$

表 10 ミシン縫いの技能

学年	度数	平均値※	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
1年	13	6.9231	2.06000	.57134	5.6782	8.1679	4.00	10.00
2年	7	11.1429	1.46385	.55328	9.7890	12.4967	9.00	12.00
3年	11	9.7273	2.45320	.73967	8.0792	11.3754	5.00	12.00
4年	10	9.8000	3.73571	1.18134	7.1276	12.4724	0.00	12.00
合計	41	9.0976	2.95639	.46171	8.1644	10.0307	0.00	12.00

※ミシン縫いの技能に関わる3項目合計の平均値

項目毎に、4点：できる 3点：説明書を見ればできる 2点：できない 1点：やったことがない 0点：わからない  
 学年間の有意差（一元配置の分散分析）： $p < 0.005$

## まとめ

教員養成大学において、家庭科教員を目指す学生への被服製作指導力を育成するためには、縫いの技法（手縫い、ミシン縫いなど）と短時間で製作可能な教材研究が重要になる。そこで、本研究では被服製作を担う教員養成指導のあり方を探ることを目的とし、大学生を対象として各学校段階における被服製作学習経験および縫いの技法の習得経験について分析を行った。その結果、次のことが明らかとなった。すなわち、被服製作に関わる実習科目を1年次に配当しているが、2年次以



降も、被服領域の専門科目において、座学と実習の組み合わせを考えることにより、製作技能やその理論的裏づけを学習できるカリキュラム構成にすることが必要である。

#### 引用文献

- 堀内かおる・武井洋子・田部井恵美子. 1988. 「被服製作及び手芸の教育的意義：学習要求からの考察」『東京学芸大学紀要』40, 第6部門, 127-140.
- 川合みちる・谷口明子・平嶋憲子・中嶋たや・菱田道代・河崎智恵・鈴木洋子. 2008. 「小・中・高等学校の系統性に配慮した被服製作題材の検討」『奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』17, 191-199.
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター. 2009. 「特定の課題に関する調査（技術・家庭）調査結果（中学校）」139-140.
- 三輪聖子・辻泰子・夫馬佳代子・西村敬子. 2001 「家庭科教育における被服領域の現状と動向—被服製作の実態と意識—」『岐阜女子大学紀要』30, 153-159.
- 長山芳子. 2011. 「大学生の小・中・高校時における被服製作経験とミシン実習後の変容—初等教員養成のためのハンカチ袋作り授業効果—」『福岡教育大学紀要』60, 第5分冊, 215 - 221.